

『シリーズ 現代の生態学』刊行にあたって

「かつて自然とともに住むことを心がけた日本人は、自然を征服しようとした欧米人よりも、自分達の幸福を求めて、知らぬ間によりひどく自然の破壊をすすめている。われわれはいまこそ自然を知らねばならぬ。われわれと自然とのかかわり合いを知らねばならぬ。」

これは、1972～1976年にかけて共立出版から刊行された『生態学講座』における刊行の言葉の冒頭部である。この刊行から30年以上も経ち、状況も変わったので、講座の改訂というより新しいシリーズができないかという話が共立出版から日本生態学会に持ちかけられた。この提案を常任委員会で検討した結果、生態学全体の内容を網羅する講座を出版すべきだという意見と、新しいトピック的なものだけで構成されるシリーズものが良いという対立意見が提出された。議論の結果、どちらにも一長一短があるので、中道として、新進気鋭の若手生態学者が考える生態学の体系をシリーズ化するという方向に決まった。これに伴い、若手を中心とする編集委員が選任され、編集委員会での検討を経て、全11巻から構成されるシリーズにまとまった。

思い起こせば『生態学講座』が刊行された時代は、まだ生態学の教科書も少なく、生態学という学問の枠組みを体系立てて示すことが重要であった。しかも、『生態学講座』冒頭の言葉には、日本における人間と自然とのかかわり合いの急速な変化に対する懸念と、人間の行為によって自然が失われる前に科学的な知見を明らかにしておかなければならないという危機感があふれている。それから30年以上経った現在、生態学は生物学の一分野として確立され、教科書も多数が出版された。生物多様性に関する生態学的研究の進展は特筆すべきものがある。また、生態学と進化生物学や分子生物学との統合、あるいは社会科学との統合も新しい動向となっており、生態学者が対象とする分野も拡大を続けている。しかし、その一方で生態学の細分化が進み、学問としての全体像がみえにくくなってきている。もしかすると、この傾向は学問における自然な「遷移」なのかもしれないが、この転換期において確固とした学問体系を示すことはきわめて困難な作

業といえる。その結果、本シリーズは巻によって目的が異なり、ある分野を網羅的に体系づける巻と近年めざましく進んだトピックから構成される巻が共存する。シリーズ名も『シリーズ 現代の生態学』とし、現在における生態学の中心的な動向をスナップショット的に切り取り、今後の方向性を探る道標としての役割を果たしたいと考えた。

本シリーズがターゲットとする読者層は大学学部生であり、これから生態学の専門家になろうとする初学者だけでなく、広く生態学を学ぼうとする一般の学生にとっても必読となる内容にするよう心がけた。また、1冊12~15章の構成とし、そのまま大学での講義に利用できることを狙いとしている。近年の日本生態学会員の増加にみられるように、今日の生態学に求められる学術的・社会的ニーズはきわめて高く、かつ、多様化している。これらのニーズに応えるためには、次世代を担う若者の育成が必須である。本シリーズが、そのような育成の場に活用され、さらなる生態学の発展と普及の一助になれば幸いである。

日本生態学会 『シリーズ 現代の生態学』 編集委員会 一同